

オープンガーデン活動の位置づけに関する考察

—コミュニティ意識とライフスタイルの現在—

土屋 薫*・林 香織**・崎本 武志***

要 約

レジャー活動を媒介とする趣味縁は、ポスト消費社会における幸福にとって大きな役割を担うが、日本のオープンガーデン活動は趣味縁としての側面だけでなく、ライフスタイルの発露としての側面も持っているため、活動の持続性に関しては当該のエリアの参加者がどのような意識で活動を立ち上げたかによって異なってくるので、その点を注視する必要がある。その意味では、レジャー診断ツールも当事者たちの自己認識と今後の運営方針を定めていく上で、有効性を持ち得ると思われる。

キーワード：ポスト消費社会、趣味縁、余暇退屈度（LBS）

1. はじめに

日本のオープンガーデン活動はどこへ行くのか。これが本研究の中心的課題である。1927年にイギリスに端を発したオープンガーデンは、本国ではチャリティとしての営みを保ったまま続いている。またそうした姿が続くことによって、その営みに携わる者の価値と権威を高めていく感さえある。

それでは日本の場合はどうか。先駆的な活動が1992年に北海道の恵庭市で始まったとはいえ、その活動が市民権を得たのはガーデニングブーム以降と言っても良いのではないだろうか。ガーデニングブームは、「ガーデニング」という言葉が1997年に流行語大賞にノミネートされた頃と位置づけられている。それ以前はそういった言葉の使

い方自体行われていなかったことを考えると、何か奇異な感じもするが、社会の中に選択肢として定着するという事は、そもそもそういうことなのだろう。レジャーという言葉でさえ今はすっかり手垢のついた言葉であるが、元をただせば1960年代に新聞用語として定着した外来語である。

実際のブームの立役者と言われる八木波奈子氏によれば、ガーデニングブームの初期の担い手は「キルト愛好者」であったと想定される¹⁾。「BISE」という雑誌の編集者として、ライフスタイルと関わる趣味の事例としてガーデニングを特集記事の方向性に定めたというのである。だとすれば、ガーデニングやオープンガーデン活動の担い手たちは、趣味の活動としてではなく生き方の選好度として選んだことになる。もしそうだとすると、これはレジャー活動の選択肢としてではなく、歴史的な事件、たとえば「ヒッピー・ムーブメント」と同様の位置づけでとらえないといけないことになる。

本研究はこうした問題意識に立ち、オープンガーデンという活動がどのように位置づけられ、ど

2021年11月30日受付

* 江戸川大学 現代社会学科教授 レジャー社会学

** 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科准教授
メディアコミュニケーション論

*** 江戸川大学 現代社会学科教授 観光産業論、ホスピタリティ・マネジメント

こへ向かおうとしているの探ろうとするものである。

筆者らの先行研究によれば、現在日本には地域ごとに100を超えるオープンガーデン活動が動いている。残念ながら新型コロナウイルスの感染状況によって、2020年・2021年と実施が見送られているところが多いけれども、逆に言えば、今そして今後どうなるかによって、これまでの日本のオープンガーデン活動の姿が見えてくるのかもしれない。ただコロナ禍において閉店して行った多くの飲食店を思うと、その価値と持続可能性とは必ずしも比例しないことが予想される。

またこれまでの研究では、同じオープンガーデン活動と言っても主催者のタイプによって、その運営や特徴が大きく異なることがわかっている。さらに趣味縁としての活動と地縁（地域コミュニティ）の結節点としての位置づけも見られる。

そこで本研究においては、全国のオープンガーデン活動を実践しているそれぞれのオーナーではなく、運営サイドを対象に実態調査を行い、日本のオープンガーデンの位置づけについて検討することを目的とする。

2. 先行研究と研究の方法

本研究は、趣味縁を構築していくに際して、情報がどのような媒介となりうるのか、という問題意識を出発点としている。またその際、情報の交換に着目している。そこで、情報の流通がある程度と限定的なレジャー活動を取り上げることが望ましい。

そこで本研究では、調査対象として、現在活動が確認されている全国95のオープンガーデンの事務局を対象にして質問紙調査を行った。

なお本研究は、2019年度科学研究費基盤研究(C)課題番号19K12554、「主催者意識及び立地環境をパラメーターとしたオープンガーデンマップの観光基盤モデルの完成」、研究代表者：土屋薫、研究分担者：林香織、崎本武志、下嶋聖)の一環として行われたものである。

3. 調査結果

(1) レジャー活動の参加度

レジャー活動の実態を把握する手段として参加度をとらえることはある程度有効であるが、全てのレジャー活動を調査票に盛り込むことはできない。そこでここでは、財団法人余暇開発センターによってつくられた活動区分とデータを参考にすることにしたい。

図1は1993年から20年間の日本人の参加度ベスト20に位置するレジャー活動の変遷である。

こうしてみると、2012年のベスト10であるレジャー活動は、それまでの20年間、必ずベスト20以内に位置していることがわかる。また、その間の20年間の平均は表1のとおりである。

2019年までは20位以内の変動は比較的緩やかであったが、新型コロナウイルスの影響で、2019年から2020年への変化はおもいがけないものとなった。

このうち、先行研究との比較のためにピックアップしたレジャー活動に関する調査結果をレーダーチャートとしてまとめたのが下記の図2である。

新型コロナウイルス対策の影響から、在宅鑑賞系のレジャー活動への参加率が高くなるのは前提としても、今回のサンプルでは、国内旅行・ドライブと、比較的空間系・行動系のレジャー活動への参加が特徴的に見られる。

(2) レジャー退屈度 (Leisure Boredom Scale) のスコアによる分析

レジャー研究の領域では、個人のレジャーの状況を捉える手段として、様々なレジャー診断ツールが研究・開発されてきた。このうち、Iso-AholaとWeissingerの開発したレジャー退屈度 (Leisure Boredom Scale) は、より少ない項目数でレジャーの働きを捉えることのできるスケールである²⁾。また日本においても、16項目のショートバージョンをさらに8項目にトリミングした調査研究において、その妥当性と信頼性が確認され

オープンガーデン活動の位置づけに関する考察

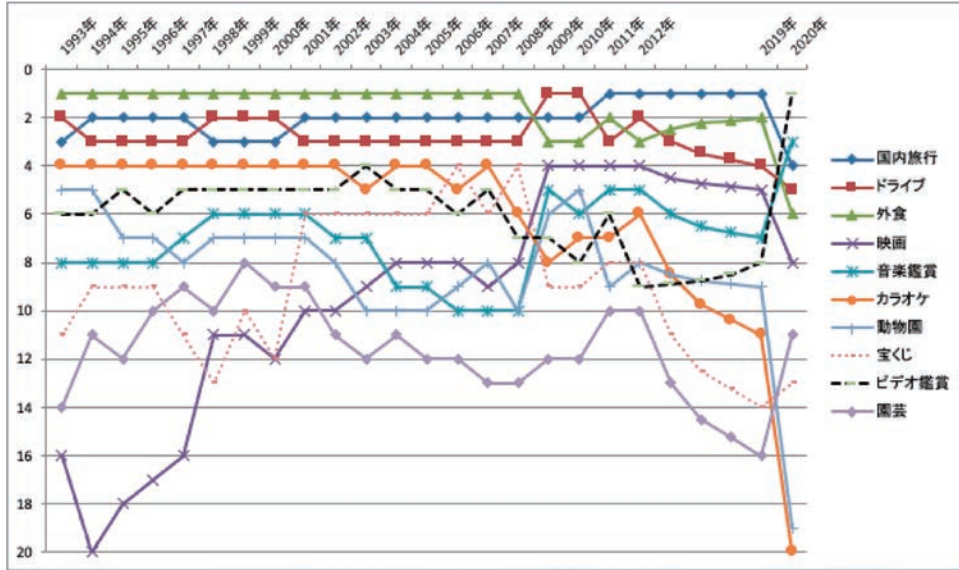


図1 1993 - 2012年の日本人のレジャー活動の推移

表1 1993 - 2012年の日本人のレジャー活動の平均順位と2020年の順位

2012年ベスト10	1993-2012の平均順位	2019年の順位	2020年の順位
国内旅行	2.1	1	4
ドライブ	2.6	4	5
外食	1.4	2	6
映画	10.4	5	8
音楽鑑賞	7.3	7	3
カラオケ	4.8	11	20
動物園	7.7	9	19
宝くじ	8.1	14	13
ビデオ鑑賞	5.8	8	1
園芸	11.0	16	11

ている（土屋・澁谷，1997，澁谷・土屋，2001）。以下，全国都市部住民のデータ（札幌・東京・名古屋・大阪の4地点から回収された317サンプル）も参考にしながら，今回の調査結果について検討を進めてみたい。

レジャー退屈度の具体的な設問は図3に示した（以下，質問項目はオリジナルのレジャー退屈度の番号に合わせて，LBS1・LBS3・LBS5・LBS6・LBS10・LBS11・LBS14・LBS15と書き表すもの

とする）。

レジャー退屈度のトータルスコアの分布は高い負の歪度を示し，分布としては正規分布と言えないものであった（図4）。

またレジャー退屈度の平均は，トータルスコアで12.22，標準偏差は6.73であった。また各項目の最小値は1点，最高値は5点であった。

各項目の平均は，1.44（LBS5：自由時間のときには，何をしても無駄なような気がする）から

オープンガーデン活動の位置づけに関する考察

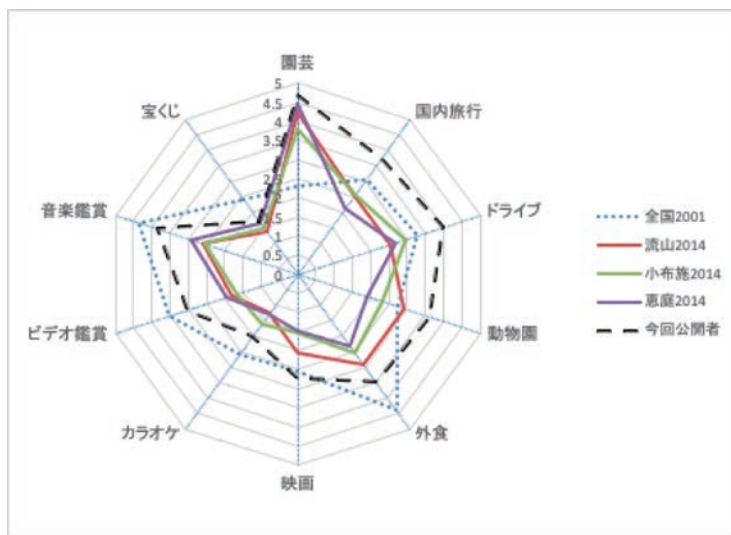


図2 参加状況の比較

	全くそう 思わない	あまり そうは 思わない	どちら とも いえない	やや その とおり である	全く その とおり である
私にとって、自由時間は面倒で厄介なものである。	1	2	3	4	5
自由時間があると、退屈してしまう。	1	2	3	4	5
自由時間のときには、何をしても無駄なような気がする。	1	2	3	4	5
自由時間の際、いつもやりたいことをやっているわけではないが、かといって、ほかにどうしたらいいかわからない。	1	2	3	4	5
自由時間に何かしたいのだが、何をしたらいいかわからない。	1	2	3	4	5
自由時間の大部分を寝ることで過ごしてしまう。	1	2	3	4	5
余暇活動をそれほど楽しいとは思わない。	1	2	3	4	5
私は、余暇活動を楽しむ術(すべ)をあまり身につけていない。	1	2	3	4	5

図3 レジャー退屈度の質問票

1.59 (LBS15:私は、レジャーを楽しむ術(すべ)をあまり身につけていない)の間に位置していた。このことから、「LBS3:自由時間があると退屈してしまう」、「LBS6:自由時間の際いつもやりたいことをやっているわけではないが、かといってほかにどうしたらいいかわからない」と並んで、レジャーを楽しむ術を知らないことがレジャ

ーを楽しめない最も大きな理由になっていることがわかる(表2)。

今回の調査票においては、レジャーに関して否定的な記述がされている8項目全部に、「全くそのとおりである」と回答する(「レジャーは完全に退屈である」ということを意味する)と、トータルスコアは40点となるように集計し直した(8

オープンガーデン活動の位置づけに関する考察

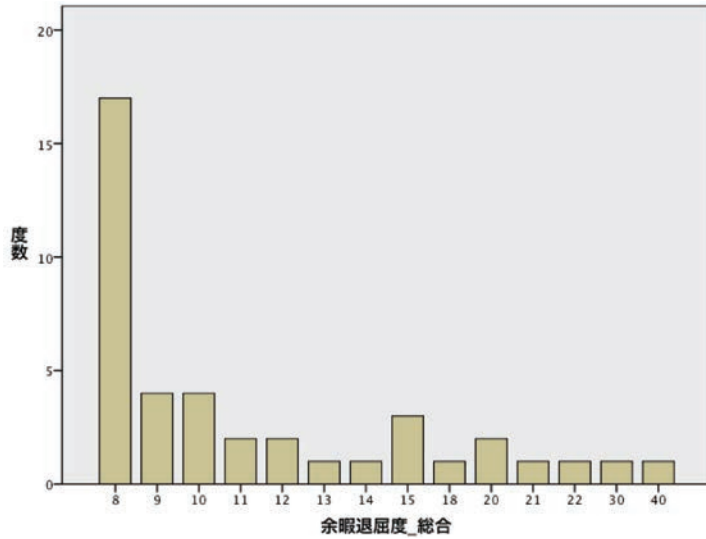


図4 レジャー退屈度のトータルスコア度数

表2 レジャー退屈度の基本統計量

		LBS 1	LBS 3	LBS 5	LBS 6	LBS 10	LBS 11	LBS 14	LBS 15
度数	有効	41	41	41	41	41	41	41	41
	欠損値	14	14	14	14	14	14	14	14
平均値		1.56	1.59	1.39	1.59	1.56	1.54	1.49	1.59
中央値		1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.50
最頻値		1	1	1	1	1	1	1	1
標準偏差		.976	.974	.891	.921	.976	1.052	.923	.999
歪度		1.856	1.966	2.689	1.955	2.026	2.067	2.392	1.886
歪度の標準誤差		.369	.369	.369	.369	.369	.369	.369	.369
尖度		3.156	3.709	7.409	4.229	3.878	3.292	5.687	3.149
尖度の標準誤差		.724	.724	.724	.724	.724	.724	.724	.724
最小値		1	1	1	1	1	1	1	1
最大値		5	5	5	5	5	5	5	5

項目×5点満点)。また、8項目全てに「あまりそうは思わない」と回答すると16点になる計算である(8項目×2点)。このことから、平均点が12.22であることは、平均的には、回答者はレジャーを「退屈ではない」と考えていると判断できる。

また、全国都市部のデータと比較してみると、全国のトータルスコアの平均は17.96となってい

るので、今回の調査対象の特性として、自らのレジャーに不満を抱えている率の低いことがわかる。また標準偏差に関しても、全国データ7.92に対して、6.73となっており、全国データと比べてばらつきの少ないことがわかる。

ただし、純粋に公開する庭のオーナーにのみ質問した2014年のデータでは4.14となっているので、オーナーではなく、純粋にマネジメント側の

回答者も含む今回のデータは、ややバラついていると言える。

(3) レジャー退屈度のサブスケールに関する検討

全国都市部のデータによる2001年の先行研究では、「レジャー陰性 (Leisure Negative)」と「技術不足 (No skill)」という2つのサブスケールの存在が確認されている(澁谷・土屋 2001, 土屋 2006)。

そこで、今回のサンプルに関して因子分析を行った結果、表3のように1つの因子しか抽出できなかった。スケール全体の信頼性係数はクロンバックのアルファで0.92であり、独立した尺度としての一貫性を保持しているものと考えられるが、共通性に着目してみると、「LBS10：自由時間に何かしたいのだが、何をしたらいいのかわからない」の寄与率の低いことがわかる(表4)。これは先行研究と同様、ガーデニングというレジャー活動への活意度が高いと思われるサンプル特性との関係で現れて来た数値と思われる。

そこで、先行研究と同様に抽出する因子を2つに固定したところ、表5のような結果を得た。全分散は2因子で85.62%の説明力があるが、因子の内容に関しては、回転後の行列と因子成分のプ

表3 レジャー退屈度の因子分析

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和		
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%
1	6.137	76.710	76.710	6.137	76.710	76.710

因子抽出法：主成分分析

ロットから考えてみたい(表6・図5・図6・図7)。

これによれば、今回のデータは一見、2014年のデータの「地方公共団体型」のように一直線に各項目が並んでいるように見える。しかしながら、実は2014年のサンプル全体に見られるような、同じ因子に属する項目が近くに並んでいることがわかる。今回の調査では運営のスタイルについても質問しているので、その結果によってファイルを分割して、それぞれの塊で同様に因子分析をかけてみた。その結果、運営する主体(質問11)、定例会の頻度(質問18)、議決手段(質問19)、オープンガーデンによる達成目標(質問25)において、今回のデータ全体と同様の因子構造が見られた。

すなわち、「オープンガーデンのためだけの運営組織」(質問11の選択肢2)、「年1回程度の定例会」(質問18の選択肢6)、「定例会による議決」(質問19の選択肢2)、「個人のガーデニングスキルを上げること」が達成目標(質問25の2)、「ご

表4 レジャー退屈度項目に見られる共通性

	初期	因子抽出後
LBS 1	1.000	.843
LBS 3	1.000	.904
LBS 5	1.000	.938
LBS 6	1.000	.859
LBS 10	1.000	.746
LBS 11	1.000	.861
LBS 14	1.000	.891
LBS 15	1.000	.807

因子抽出法：主成分分析

表5 2因子によるレジャー退屈度の分析(斜交解)

成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			回転後の負荷量平方和 ^a
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%	
1	6.137	76.710	76.710	6.137	76.710	76.710	5.538
2	.713	8.911	85.622	.713	8.911	85.622	

因子抽出法：主成分分析

a. 成分が相関する場合は、負荷量平方和を加算しても総分散を得ることはできません。

表6 回転後のパターン行列

	成分	
	1	2
LBS 3	1.068	
LBS 5	.921	
LBS 1	.747	
LBS 6	.669	
LBS 10	.641	
LBS 11	.504	.978
LBS 15		.737
LBS 14		.653

因子抽出法：主成分分析
 回転法：Kaiser の正規化を伴うオブリミン法

近所の方と良好な関係性を築くこと」が達成目標（質問 25 の 3）、「地元＝オープンガーデンというブランドイメージを作ること」が達成目標（質問 25 の 5）、「オープンガーデンに多くのお客様に来て頂くこと」が達成目標（質問 25 の 5）といった回答をしたグループは、データ全体と同様の因子構造が見られた。

ここ与此同时に、地域コミュニティと趣味のコミュニティの線引きを考えるヒントがあるように思われるが、精緻な分析にはもう少し情報と時間が必要かもしれない。

4. おわりに

本研究では、レジャー診断ツールのうち、レジャー退屈度からコミュニティ意識醸成のきっかけについて検討することを試みた。今後は他の診断ツールとの組み合わせると、さらに新たな知見が得られると思われる。

また検討を進め、今後のオープンガーデンの「現在位置」を探る上で、先行研究として一般財団法人日本緑化センターの刊行する『グリーン・エージ』や公益財団法人日本交通公社による『観光文化』といった雑誌の特集記事が、あらためて考察の手掛かりになるのではないかと。なぜなら、ひとつはガーデニングに関わる林業、農業、造園建設業、緑化樹木生産業といった民間各界と旧農

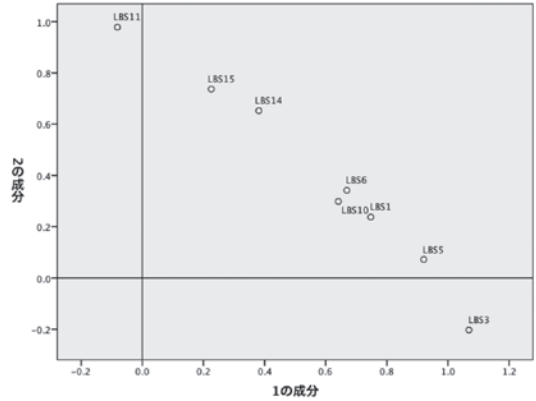


図5 レジャー退屈度の成分プロット (サンプル全体：2021)

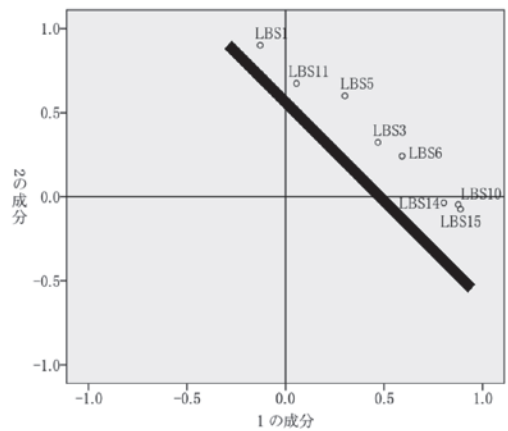


図6 レジャー退屈度の成分プロット (地方公共団体型：2014)

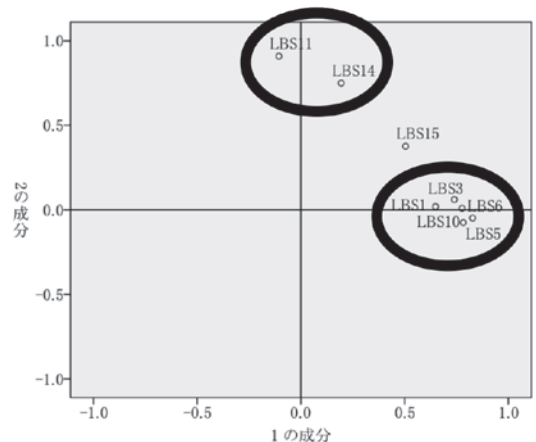


図7 レジャー退屈度の成分プロット (サンプル全体：2014)

林省・建設省・通商産業省といった省庁によって設立された組織によるもので、もうひとつはオープンガーデンの目的の一つである交流人口に関して、産業と文化の両面からアプローチしている団体によるものだからである。

そしてそれは、「グリーンインフラ」という形で地域に還元していくのか、あるいは関係人口という形で社会関係資本の一部としてとらえていくのか、今後のオープンガーデンをとらえる分かれ目を示してくれるのではないだろうか。

〔注〕

- (1) 2021年2月27日の講演会による（『BISES 共感のエネルギー』出版記念講演「ガーデニング25年の歴史とこれから ～無から有を生んだ『BISES』のドラマ～」〈グリーンアドバイザー東京主催〉）。
- (2) これは主に北米大陸において尺度としての妥当性や信頼性が確認されてきているもので、当初、6つの社会的要因（年齢、性別、人種、収入、教育レベル、職業）と心理的要因（職業倫理とレジャー倫理、レジャーレパトリー、レジャーの重要性の認識度、レジャーを妨げる制約の有無、内的レジャー動機、レジャー満足度と生活満足度）の2つから構成されていたが、さらに16項目から成るショートバージョンに絞り込まれている。

参考文献

- 茅野宏明他, 1995, 「余暇生活診断のためのツール開発に関する研究」『自由時間研究』17.
- 林香織・土屋薫・木村文香 (2009) : 『学際的アプローチによる地域研究 — 流山コミュニティモデルの構築と大学の役割 —』江戸川大学学内共同研究報告書
- Iso-Ahola, Seppo E. & Weissinger, Ellen, 1990, Perceptions of Boredom in Leisure : Conceptualization, Reliability and Validity of the Leisure Boredom Scale, Journal of Leisure Research, Vol. 22, No. 1.
- 松田義幸, 1993, 「余暇概念の再検討」多摩大学総合研究所・大和ハウス工業生活研究所編『レジャー産業を考える』実教出版.
- 松田義幸, 2001, 「脱産業社会に向けての課題 (1)」『実践女子大学生生活科学部研究紀要』38.
- 野村一路他, 1994, 「『余暇生活診断テスト』(LDB) 日本語オリジナル版作成に関する研究」『自由時間研究』15.
- 嵯峨寿, 1996, 「自己開発的レジャー享受の満足度に及ぼす主体的要因の影響度」『筑波大学体育科学系紀要』19.
- 佐橋由美・茅野宏明・野村一路, 1997, 「余暇生活設計のためのツール開発に関する研究 (II) — ILM 日本語版の信頼性と妥当性に関して —」『自由時間研究』21.
- 澁谷泰秀・土屋薫, 1996, 「青森県における高校2年生のレジャー行動に関する考察—Lisrelを用いた学際的モデルの解析—」『青森大学研究紀要』19巻2号.
- 澁谷泰秀・土屋薫, 2001, 「余暇満足度の測定と施策展開の可能性に関する基礎的研究」『青森大学研究紀要』24巻1号
- 澁谷泰秀・土屋薫 (2001) : 「余暇行動モデルの行動計量学的分析」『平成12年度私学振興財団「特色ある教育研究の推進」事業報告書』
- 土屋薫, 2001, 「都市部における余暇退避度の特性」, 『レジャー・レクリエーション研究』45.
- 土屋薫, 2004, 「『豊かさ指標』を読み込むためのツールに関する基礎的研究」『地域社会研究』12.
- 土屋薫 (2010) : 「『ガーデン・シティ』に見られる田園理想郷の系譜」『ニュージーランド研究』, ニュージーランド学会, 17巻, 19-39
- 土屋薫 (2010) : 「『流山グリーンチェーン戦略』に見られる住民参加の課題」『コミュニティ政策学会第9回大会資料集—第2分科会—』, コミュニティ政策学会, 8-10
- 土屋薫 (2011) : 「レジャー論から見た「オープンガーデン」に関する一考察 — 千葉県流山市を事例として —」『情報と社会』, 江戸川大学, 21号, 211-217
- 土屋薫・新井正彦 (2010) : 「緑化と地域コミュニティ構築の担い手に関する研究」2009年度学内共同研究成果報告書, 江戸川大学
- 土屋薫・林香織 (2010) : 「GISを用いた流山市民の生活行動分析—ライフスタイルとコミュニケーションの視覚化—」『情報と社会』, 江戸川大学, 20号, 43-50
- 土屋薫・澁谷泰秀, 1997, 「レジャー行動モデルの行動計量学的分析—青森市の事例を中心に—」『平成9年度私立大学等経常費補助金特別補助事業報告書』.
- 土屋薫・澁谷泰秀, 2000, 「レジャー行動とストレスコーピング」『レジャー・レクリエーション研究』43.
- 土屋薫・澁谷泰秀, 2001, 「青森市における余暇退避度の特性」『青森大学研究紀要』24巻2号.
- 土屋薫・澁谷泰秀, 2002, 「ストレスと余暇行動におけるニーズ形成」『青森大学研究紀要』24巻3号.